

山本文雄

元同志社女子大学
総務部長 聞く

私の青春時代

聞き手

河野 仁 昭

中学生のころ

——私はかねがね、山本先生に戦時中の神学科のお話をお聞きしたいと思っていたんです。キリスト教神学の学科が存続したというだけでも、大変だったはずの時代に神学を学ばれたわけですから。

お生まれは滋賀県ですか。

山本 生まれたのは大阪です、父が会社を経営していましたので。小学校も大阪で、中学になつて滋賀県の草津に移りました。

——たしか、膳所中学でしたね。

山本 そうです、草津から汽車で通学しました。二年生ころまでは膳所駅というのはなかったもので、石山駅で降りて歩くんですわ。石山の次は天津だった。

——石山からだといふ距離があるでしょう。

山本 二十分から二十五分かかりました。

——すると、二キロ余りですからね。教会へはそのころから？

山本 僕は九人兄弟の末っ子でね。

——末っ子という感じがあります。(笑)

山本 最初は草津の教会へ通っていた兄に連れていかれたんですよ、それから行くようになった。近江八幡のヴォーリスさんとか、

近江兄弟社の吉田悦蔵さん、吉田さんの息子さんと同志社出身の方とか、そういった人たちが教会へよくきましてご指導を受けたんです。夏のキャンプに行くとか……。

——ヴォーリスさんのこと、今でも覚えていますか。

山本 よく覚えています。

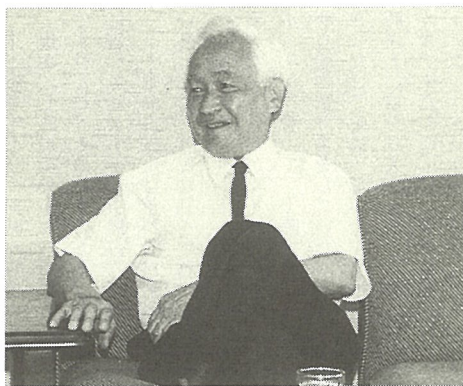
——どんな方だったんですか。私など写真でしか知らないんです。

山本 なかなかユーモアのある方でした。奥さんは華族の出なんだけど、ヴォーリスさんはね。

——庶民的な感じとか。

山本 そうではなかったけど、僕たちに対してとてもユーモラスで、接しやすいい方でしたよ。ケリーさんの印象とはまた違っていた。僕はたしか戦後、神学校でヴォーリスさんから「詩篇」を習った。

——終戦後の教職員名簿に、「客員教授一柳米米留」と載っています。そういう方たちに接していて、洗礼を受けようとか……。



山本 中学四年のときでした。洗礼を受けたのは。僕は剣道をやっていて、勉強はちつともしないで遊びほうけている不良やったから。(笑)

——不良学生ですか。(笑)

山本 ほんまにそやったですよ。それで「洗礼を受けるつもりです」いうたら先生方がびつくりして、「お前がクリスチャンになるて、一体どういうこっちゃ」(笑)。でも洗礼を受けてからはやんちゃを止めて、真面目になっ

たですよ、真面目というか……。

——なにか考えるところがあつて……。

山本 いや特別なことはなかったですよ。

同志社大学予科のころ

——同志社大学へ入学されたのは昭和何年ですか。

山本 十五年です。本来なら十三年ころには入るべきんだけど中学の二年のときチフスにかかつて、当時、避病院へ入られたりして……。

——そんなことがあったんですか。

山本 母の弟が草津で医者をしていて、「姉さん、この子あかんで」と母にいうたそうです。足腰たたないほど痩せ細つたけど、まあなんとか治つて……。だから中学の卒業が遅れたわけです。

——大学の神学科へ入ることは、お父さんもご承知で……。

山本 父は亡くなつていましたから兄が反対して、「お前、何をヤソに熱あげとんや、頭を冷やさない。そんな学校へ行つて将来どうするんや」と。

——飯食えへんで。(笑)

山本 そうそう、「そんな学校へ行つて飯食えるつもりか」と。それで浪人しましたけど、結局大学の予科へ入つたわけですね。

私が入つたのは、一部いうて三年制でした、二部は二年制で。

——すると予科が三年で、本科は旧制だから三年ですね。

山本 そうなんだけれども、昭和十七年の秋に繰り上げて修了になりましたから、二年半ですな。そして本科へ入つたと思います。

——十七年にもう繰り上げがあつたんですか。

山本 ありました。学徒出陣も。

——当時の予科長はたしか木畑浩四郎先生が亡くなられて、山田貞夫先生にかわられたはずですが、学校はどんな具合だったんですか。

山本 クラーク記念館(旧神学館)の二階に大学のチャペルがあるでしょう。

——ああ、大教室のような。いまは二つに分けてゼミの教室になってますけど。

山本 あれ元のように復元してほしいなア。あそこで毎朝、予科や大学の先生方が交替でいろんな話をされるんですね。

——戦争中も？ 何時からですか。

山本 七時三十分から八時まで。短い時間ですけどね。そのときのお話がいまだに印象に残っていますよ。中瀬古六郎先生とかね。

——中瀬古先生は予科で自然科学を教えてくださいましたね。どんな話をされたんですか。

山本 新島先生は若いときたばこが大好きだった。ところがワイルド・ローヴァー号でボストンへ着いて、上陸することができないから船の留守番をしていた。そして甲板で好きなたばこを吸っていたんだけど、ある時ふと、自分は大志を抱いてはるばるアメリカまで来たのに、こんな悠長なことしているわけにはいかんのだと、持っていたたばこやパイプを全部海へ放り投げてしもうて、それから禁煙したと。本当かどうか知りませんが、けれども、中瀬古先生はそういうられるわけです。

——金もなかったでしょうしね。ライラー船長から小遣いをもらっていたかどうか、わたしは知りたいと思っています。

山本 この話にはオチがありません。新島先生はそうやって禁煙されたんだけど、勉強を終えて帰国されるときには、アメリカのシガレットなどをお土産に持って帰ってきて

た、それを京都の、のちにたばこ王といわれる人で円山に長楽館を建てた人……。

——村井吉兵衛さん？

山本 そうそう、その村井さんにプレゼントしたところが、「これやノ」というわけで紙巻きたばこを作って全国に広めた。だから新島先生はたばこをやめて、同時に日本にたばこをもたらした人や(笑)。とまあ、そういう話をされるんですね。真実かどうか……。

——新島先生の遺品の中に、古い葉巻が一本あるんですよ、新島先生の遺品としてはふさわしくないのに、新島展にも出しませんでしたけど。ひよつとしたらお土産に持って帰ったものかも(笑)。わたしはだれかにもらったものかなアと思っているんですが、たばこを吸わない新島先生にだれかがプレゼントするというのもおかしいですね。

山本 お土産かも知れませんが。(笑)

——中瀬古先生は科学者だから、つくり話をするとは思えませんが。

山本 それから、宗教主任だった堀貞一先生もお話をされました。僕はその時分、アーモスト館の裏の此春寮(昭和十五年一月竣工)におりまして、此春寮が出来た最初の入寮生

ですわ。藤代泰三先生が寮長やった。堀先生は同志社を老齢で退職しておられたんですが、久しぶりに母校を訪ねられて此春寮へ泊まりました。十七年の正月ごろやったと思います。

——此春寮はお客さんも泊めていたんですか。

山本 そうです。神学校卒業の牧師さんとか。神学寮だったですから、礼拝なんかもちんと守っていました。

堀先生はその時、此春寮のチャペルでお話をされましたが、真珠湾攻撃の話が出ました。——昭和十七年の正月過ぎに泊まれたのなら、十二月八日の真珠湾攻撃の直後ですね。堀先生は永年ハワイで牧師をなさっていたから。

山本 日本の飛行機が編隊を組んでハワイへ接近した。するとそれまでパールハーバーは雲に覆われていたのに、その雲がパッと引いて湾が見えてきた。これを天佑神助だ(笑)。話に気合いが入ってくるんですね。(笑)——やはり時代ですねえ。堀先生がそんな。山本 僕ら感激しましたよ、「そらそうやろ」「そうやったか」と(笑)。あのころはな

ア、みんなそんな調子で……。牧野虎次総長さんなんかも勇ましい話をされました。

堀先生は昭和十八年八月二十六日に八十歳で亡くなられていますから、きつと最後のお話しでしょうね。

山本 僕らが教えを受けた最後でしょう。それからは同志社へ来られることがなかったと思います。

僕らが入学したとき、若王子の同志社墓地へ連れて行って下さったのも堀先生でしたなア。

——なにかお話を？

山本 杖のかげらと、新島先生の髪を入れた試験管をポケットから出して、僕らに見せながら、新島先生が手を打った話をされました。

堀先生は新島の打掌の場にいた生徒の一人でしたから、迫力があるでしょう。

山本 それはもう、手振りを交えて講談調で（笑）。「私はそのとき新島先生の真ん前に座っておった」と。

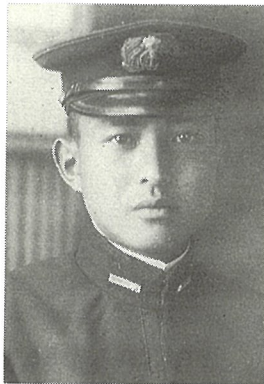
山本 先生は先生の学生時代は、新島先生から直接学んだ人のお話が聞けたんですね。

山本 僕は小型の一冊の聖書を、学生時代

からずつと持っていますけどね、それに堀先生が、新島先生が第一回の卒業式で語られたという“Go, go, go in peace, be strong! mysterious hand guide you”という言葉を英語で書いて下さっているですよ。僕はそれを軍隊へも持って行ったんだけど、海軍は偉かったね、持って行った書籍の検査はしたけど取り上げなかった。

——此春寮ですけど、神学寮として礼拝をきちんと守っていたというお話でしたが、ほかに思いに残るようなことがなにか……。

山本 早天祈禱会ですね、新島先生の永眠記念日とか創立記念日とかの。普段は六時起床でしたが、あの日の朝は四時起床で、寮から若王子まで提灯を下げて歩いたものです。ああいうことは僕らが最後でしうな、



戦後は乗り物など便利になったから。

学徒出陣

——海軍のお話が出たからおたずねしたいんですが、この『同志社時報』のインタビューで、学徒出陣の体験者は先生がはじめてなんです。昭和十八年十一月に同志社からも多数の学徒が出陣したんですが、その頃ですか。

山本 そうです、僕が本科の二年生の十二月でした。それから二年間、海軍にいて。

——じゃア、繰り上げ卒業ではなくて、在学中ですね。

山本 僕は在学年数が足りなかったから繰り上げ卒業になれなくて、在学のままでした。——在學生も出陣されたんですねえ。戦終はどこで……。

山本 八丈島の基地でね、昭和二十年八月十五日の前日でしたけど、「明日、十二時ごろ重大放送がある」といわれていて。それまでに、日本は危いらしいというニュースが流れていました。それで十五日に放送を聞いたんだけど、ガーガーいうだけで聞きとれなかった。けれども、戦争は終わったらしいという

ことで……。そのうち本部から伝令がやってきて、「戦争は終わった」と。

—そのときのお気持ちは？

山本 正直のところホツとしましたなア。しかし、九月に進駐軍が島へやってくることになって、鉄砲や剣を持たないで、丸腰で出迎えに行くよう命令された。これは怖かったですよ。

—上陸してくる進駐軍の出迎えですか。

山本 そうです、行けいわれて。進駐軍は怖いがな、こっちは丸腰やけど、向うは日本軍がなにをするかわかん思うて警戒してかかっているから。だから、われわれは武器は持つていないということを解ってもらわんらんとか、ずいぶん苦労した。

—英語がおできになったからよかったですね。

山本 いやいや、下手な片言英語だから。でもまア進駐軍の中に二世もいて、少しサポートしてもらったりしながら陣地を案内したり、一カ月ほどそんなことをして、相手は僕らの陣地の航空写真を撮っていてね、どこになにかあるか全部知っていた。(笑)

—でもまあ無事に役目を終えられて。

山本 ぼくは砲台長だったから部下より最後まで残って、島の整理をしてから二十年十二月に帰りました。ポツダム中尉で、軍から退職金を三千円もろうて。(笑)

—二年間命がけの仕事させられて三千円。

山本 でも当時のことやから大金や思うたで(笑)。伊豆の伊東へ上陸して一週間ほど遊



んでいるうちになくなってしまうけれど。

—新島先生も箱館航海の若いときは、同じようなことだったようですよ。

神学科本科のころ

—神学科へ復学されるわけですが、ご卒業は何年ですか。

山本 二十一年の九月、なんか年度の途中

の中途半端なときだけど、二十一年九月でした。

—すると実質的な学年数は二年半くらい？

山本 二年か二年半、まる二年でしょう、ギリシア語などもやられたけど。

—学徒出陣前と復員後では大きい変化があったと思いますが、出陣までの神学科にはどんな先生がおられたんですか。

山本 多士落々でね、有賀鉄太郎、魚木忠一、大塚節治、富森京次、本宮彌兵衛、こういった先生方に習いました。神学科のよき時代の最後といわれているときです。僕の予科時代の保証人は有賀先生でした。

—竹中勝男先生には習われなかったんですか。

山本 「厚生学原理」を習いました。その授業中にちよつとドイツ語の下調べをしるところを見つかつて、「君、不真面目やないか、講義をちゃんと聞け」と小言をいわれたことがあります。厳しい先生でした。

—学生の人気があったのはどなたですか。

山本 富森先生でしたなア、人気があった

ですよ。それから本宮先生は東北弁が抜ける方でした。とてもいい先生ですね。

魚木先生はご承知だろうと思うけど、僕らが習ったのは「日本精神史」でした。

——『日本基督教の精神的伝説』（昭和十六年）というご著書を読みましたけど。新島先生の思想なども日本のなにもに引きつけて書いておられますね。

山本 そうでしょう。僕らは魚木先生から本居宣長とか加茂真淵などについて講義を聞きましたけど、ああいう講義は戦争中やないと聞けんでしょう、神学校では。

——山本先生のころ、神学科には何人ぐらい学生がいたんですか。

山本 七名か八名でした。緒方純雄先生ね、いま新島短大の学長をしている、あの方などが同級生で。それから文という韓国学生もいました。この人はのちに韓国の文部大臣になったですよ。

——私は同志社がキリスト教神学を教える神学科を、戦争中もずっと維持したのは偉い、さすが新島以来の伝統だと思っているんです。宮川実践神学講座を聞いたたり……。文科系の学部学科は国立大学でさえ政府の命令で

統合縮小された時代だけに余計にね。経営的にも大変だっただろうと思いますね。

山本 そりや大変だったんです。その時分に松山三郎という先生が神学校の専任講師をしていたんだけど、召集で兵隊にとられてね、その留守を守っていた奥さんが同志社へ給料をもらいに行ったら、「松山さんは辞めていまして、給料はありません」といわれた。同志社の財政が苦しかったからですけどね。松山先生はあとでそのことを知って怒ってしまった。同志社へは帰って来なかったですよ。その後も同志社教会へはずっと来ておられて、去年亡くなりました。とにかくそういう時代だった。

——山本先生の指導教授はどなたですか。

山本 富森先生でした。復学してしばらくしたら、「山本君、論文を書かんと卒業できんぞ」といわれる、「なに書くんや」と。僕は論文なんて苦手ですね（笑）。「何書きましようか、新約でもやりましようか。パウロでも書きますわ」というたら、「じゃあ『パウロ神学の序説』という題で何か書きなさい」と題をいただいて、それからあちこちの文献からいわれる糊と鉄というやつで（笑、なんとか「パウロ神

学の序説」というのをまとめましたんや。これが卒業論文で。

卒業後も同志社で

——終戦直後のことですからお仕事も得にくかっただろうと思いますけど。

山本 「君、これかどないするのや」と富森先生にいわれて、「伝道したいと思いますけど、勉強が足りませんので、もう少ししばらく神学校で勉強したいなと思っています」と答えた。したら「それなら神学部の研究室のお手伝いをしながら勉強なさい」ということで……。

——助手として？

山本 そうじゃのうて、書記補というたか書記というたか、そういう職名でした。そして図書室の仕事を手伝いながら上鳥羽教会の牧師をしていたんですよ、二年間ほど。したらまた富森先生に、「山本君、将来どないするのや、神学校へ残るつもりやったら留学してこないかんやろ」といわれまして。

——留学して神学部（昭和二十二年四月、神学部として独立）の教員になつてほしかった

たのとちがいますか。

山本 いやいや、「私は留学はしたいですけど、学者の素質はないし、勉強もあまり好きではありませんので、学生部で学生相手の仕事をしたいと思います」。そういうたら、「そんならちょうどええ、学生主事になったらどうや」と、今度は学生部の仕事をするようになりましてな、上鳥羽教会の牧師を兼ねてですけど。

——そうそう、学生主事という職名がありましたなア、大学紛争ころにうやむやになってしまいましたけど、わたしなどが最後の主事でしょう。戦前からの職名で、生島吉造、水内数之助といった先生方が最初ではないかと思いますが、当時は学生の風紀や思想の取り締りで、学生からこわがられた。(笑)

山本 そうでした。戦後になって学生主事の仕事も変わってきましたけど、僕るとき学生部長はどなただったか、和田洋一先生かな、——高橋貞三先生か松好貞夫先生あたりとちがいますか。あの時分の人事はころころかわってわかりにくいんです。大江直吉さんは山本先生よりも先に……。

山本 大江さんはいました。

シカゴ神学校留学まで

——シカゴ神学校へ留学されたのは、学生主事のときですか。

山本 そうです。休職にしろもうて。学生主事をしていて、やはりアメリカへ行つてみたくなりましてな。神学校から行くのやつたら次の人材を育てるためですから、研究テーマなども与えられて、きちんとやらなくちゃならないけど、僕はそうではなかったから自分であちこちへ願書を出しまして、留学させてくれる学校を探したわけです。それからウイスコンシン大学から返事がきて、奨学金を出すからくるようにと。嬉しかったですよ、これでアメリカへ行けると思ってたですわ。昭和二十六年でした。

——あのころ留学なんてねえ、大変なことですから。

山本 喜んでいたところが、健康診断でひつかかって……。

——どこが悪かったんですか。

山本 当時は外国へ行くとき、進駐軍が指定した外国人の医者か、外国で勉強した医者

の健康診断を受けて、その医者のオーケーがないことには外国へ行く許可が出ませんでしてな。僕はウイスコンシン大学の書面を持ってアーモスト館のケリーさんの奥さんにみてもらいに行った、レントゲンの写真持つて。

——「あかん」て……。

山本 「これはいかん、ここに肺浸潤の症



状がある」といわれて……。僕は自覚症状があるわけでもないし、念のために京大付属病院の結核へ行つて、岩井という先生にみてもらったら、やつぱり「ここにちよつとした影がある」と。それでキャンセルされてしまいましたね、残念でね。

——当時は結核の人が多かったから。山本 夏休みも含めて、それから二、三カ

月下宿で静養しましたかなア。そんなことをしていたら園部（望）君が見舞いに来てくれて、「君、どうもないのに、留学でけへんもんやさかいふて寝してるのやろ」（笑）

——きついねえ。（笑）

山本 園部君はビール下げてきてくれましたな（笑）。元気になってから、下手な鉄砲も数打ちや当たるで、あっちこちの大学へ願書を書きましたんや。そしたらシカゴ神学校からワールド・フェローシップを出そうと通知が来て。僕の前に藤代（泰三）先生がそれをもたらって行っていました。その次が嶋田啓一郎先生で、どういうわけか次に僕がもらえることになって。

——よかったですね、あの時分私費留学なんて考えられないから。

山本 僕は英語の自信がないもんやから、女子大学のヒバード（エスター・L・ヒバード）先生に会話を習いに行つた。お家は上立売通室町下ルか、今もあるでしょう、駐車場になっている側の宣教師館。

——あります。

山本 そこへ通つて、ヒバード先生には随分お世話になったんですわ。英会話を習いに

行つたら、「あなたは体が悪いんだから栄養をとりなさい」いうて、いつも卵をいただいたリミルクを飲ませてもらつたり……。そのヒバード先生のおうちへ、シカゴ神学校の先生が旅行のついでかなにかで立ち寄られて、そこで面接を受けて。

——タイミングがよかったですね。

山本 僕は英語苦手やけど、ヒバード先生がいろいろうまく誘導してくれました。その前にちよつとした論文を出しておきましたから、無事に面接が終わつて、オーケーになった。

楽しかった留学生活

——その時分はアメリカへ日本人が沢山行つてゐるわけでもないし、大変だったでしょう。情報もほとんどなかったし。

山本 僕は出迎えをお断りしておいたから、サンフランシスコへ着いても一人ぼっちでね。検査が終わつたトランクを下げて、尋ね尋ねして駅へ行つて、大陸横断の汽車に乗つた。そしたら黒人の日本でいう赤帽がきて、「僕は学生やから結構や」いうのに、トランクを持つてしもうて、汽車へ放り込んでくれた。

——チップは？

山本 問題はそれや（笑）。僕は旅費は先に払つておいて、ポケットにはシカゴまでの食事代しかない。

——シカゴまで時間はどれくらいかかるんですか。

山本 二昼夜、四十八時間。仕方がないからポケットにあつた小銭を二十五セント渡した。そしたら「ノー、ペーパー・マネー」。お札でないと駄目やと。僕は怖いもんやから、手伝つていらんに手伝うてもろうて、一ドル取られた。

食堂車がまたえらいことで、ウェイトレスに「パンと卵」と英語でいうたら、「パンで、どんなパンや」「卵はよう焼くの半分焼きか」よう解らん英語できますねん（笑）。「茹でて下さい」いうたら、「スリー・ミニッツ？ フォア・ミニッツ？」。要するに三分茹でるのか四分かいうことで。言われることがさつぱりわからんので、二日間エッグとトーストばかり。（笑）

——当時日本から行つた人は似たりよつたりだったでしょうね。

山本 なんとかシカゴへ着いたら、到着時間との連絡はしておいたので、大学の方が迎え



に来て下さっていて、「よう来た、腹がへつて
いるだろう」というので、「いや、へつていな
い」とこたえたら、「そんなはずはない、へつ
ているはずや」(笑)。そしてレストランへ入
ってよう食べるんですわ。立派な体格の方や
し、僕は教授がわざわざ迎えに来て下さった
のかと思っていたら、あとで聞くとところによ
ると、オフィスの役職でもなんでもない人で、
よう食べたのは、僕を迎えるための公費やつ
たらしい。(笑)

——寮生活で困ったことはなかったです
か。

山本 そういうことはあまりなかったけど
一カ月に一回電話当番がありましてなア、こ
れはかなわなかった。英語のヒヤリングがま
だ十分できないので、相手のことを理解し
にくい。デートの伝言とか、だれを呼んで
くれ程度ならまだええけど、ちよつとこみい
った話になるとね。だから「私は日本から来
た留学生やから、英語できまへん」。それでも
まだしゃべるから日本語をべらべらしやべつ
たら、電話の相手が「アイム・ソリー」とか
なんとかいうて。(笑)

——授業で講義を聞きとるのはむずかしい
ですね。

山本 一年程度ではむずかしい、二年か三
年いないと十分とはいえんでしょうなア。僕
は単位は一応とりましたけど、M・A・をも
らう気はなかったから興味のある科目だけ登
録しましてね。

神学校の先生ではなかったけど、カール・
ロジャースという心理学の先生がいて、僕は
その授業に興味があったものだから、ロジャ
ース先生の影響で、実践神学を中心にパスト

ラル・カウンセリングを学んで、それからカ
ウンセリングが病みつきになったわけです
よ。

——なるほど、カウンセラーの山本先生は
そこで誕生されたわけですか。

山本 僕はアメリカ文化を広く勉強したい
と思っていたから、シカゴの市民とも交わっ
てよく遊びました。フル・スカラーシップだ
ったし、小遣いまでもらえるので、生活費に



は困らなかつた。

——敗戦国の人間だということで特別視されることはなかつたですか。

山本 いや、かえつて敗けた国から来たというので、大事にされたですよ。日曜日などYMCAとか教会から招待を受けて、十分か十五分ほどお話をしたり、懇談会に出たりしてお小遣いまでいただいて。日曜日は毎曜そういう過ごし方をして、それがとてもよかつたと思います。

——日本人が珍しかつたんでしょうね。

山本 二世や一世はいたけど、日本人学生とか会社員などには会わなかつた。いたかも知れないけど、非常に少なかつたですよ。それから、ヒバード先生のご両親のお家へ遊びに行つて、一週間ほど泊つたことがあります。

——アメリカへ帰つておられたんですか。

山本 ウィスコンシンのマジソンという町にね。きれいな森の中のお家で。お父さんは非常に好々爺だつたけど、お母さんは厳格でした。「何か欲しい物ないか」いわれるから「何も不自由はしていないけどラジオが欲しいです」言いましたんや。そしたら「そんな

贅沢品は駄目! ラジオを聞いていたら勉強できません」つて。(笑)

——贅沢品だつたんですね、アメリカでも。いや、お母さんが特にそうだったか。

山本 お父さんはここにこゝ笑つていて、「それで御座候ですか」とか、なんとかで候や(笑)。ちよけてやけど、面白いことばを使うて。

——格調が高い。(笑)

山本 ご飯のとき二人がいろいろ話かけてくるんやけど、その受け答えをしようと思ふとご飯が食べられへんで。(笑)

——英語だから。

山本 とときどき日本語も交じるけどね。それからお母さんが、「寮でベッドは自分で作っているのか」と問うもんやから、「いえ、僕は太工と違いますから」(笑)。こういうたら二人がけられから笑うんだ。ベッド・メーキングのことやつたんだけど、その時分そんなこと知らなかつたのでね。

——神学校には何年間おられたんですか。

山本 昭和二十七年から一年ほど。よい経験をさしてもらいました。

同志社人として

——帰国されて同志社へ復帰したのは、やはり学生部へ?

山本 そうそう。

——すぐカウンセリングを?

山本 いや、しばらくたつてからです。学生部はむかしの補導ではいかんというわけで、全国的にカウンセリングが流行のようになりましてね。同志社ではドロシ・デッソウ先生とか、ソーシャル・ケースワークの大塚達雄先生とかが大いに協力して下さつて。下さつて、大変有難かつたです。

山本 石井先生は熱心やつたから。

——大学ではほとんど学生部のお仕事に終始されて、それから女子大学の総務部長に転出なさつたんですが、田辺校地への移転の時期だつたから大変だつただろうと思います。

山本 皆さんがよくやつて助けて下さつたから、まアなんとかな。

——それから今年の三月まで梅花学園の学園長をされたんですが、梅花は何年?

山本 七年つとめさせていただきました。
ちようど任期が終ったものだから。

——新島先生と梅花を創られた沢山保羅先生とは、やはりタイプとか学校経営の考え方がちがいますか、同じコングリゲーションリストですが。

山本 違いますね、留学時代からして新島先生はハーディーさんのおかげでエリート・

コースを歩いたけれども、沢山先生は経済的に非常に苦しくて、正規の卒業はしていない。学校を創ってからも、新島先生は神様からいただくものは進んでいただくけれども、沢山先生は日本人による自給自立でしょう、何度も破産しかけたんですよ。

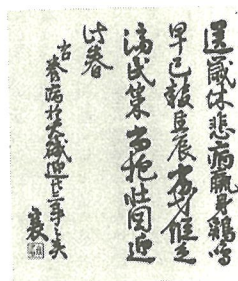
——今後のお仕事は？

山本 同志社の理事をつづけてやるように

と強くいつて下さるので、若い人に代わるべきだと思うのですが、もうしばらくつとめさせていたくのと、同志社教会の協力牧師としてできる限り尽力させていただこうと思っています。

——どうも長時間、興味ぶかいお話を有難うございました。

(一九九三年八月三〇日、担当理事室にて収録)



新島襄の色紙の影本を頒布

同志社の創立者新島襄の書簡・色紙などの遺墨に日常接する機会は少なく、せめて複製された色紙でも欲しいとのご要望に応えて、色紙の影本を、四点作成頒布しています。

この影本は、明治二二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだもので、同志社関係者のみでなく、一般社会にも強く訴えるものがあると思います。

◎ 色紙(影本)

一葉 一、〇〇〇円(送料一七五円)

(A) 「時危思偉人」

明治二二年一月徳富蘇峰の依頼に応えて揮毫されたもの。

(B) 「不止月下併能越

豈涉八州是我分
壯圖却促男児涙 滴々跋為縷々文」

明治二二年一月八日新潟伝道に従事していた卒業生広津友信におくられた詩。

(C) 「送歲休悲病瀧身 鷄鳴早已報佳辰

劣才縦乏済民策 尚抱壯圖迎此春」

明治二三年一月一日大磯百足屋で春を迎えて詠まれた。

(D) 「真理似寒梅

敢侵風雪開」

◎ 購入ご希望の方は左記へ、直接電話または文書でお申し込み下さい。

◎ 代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから、後日ご送金ください。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入
電話(〇七五)一二五一・三〇三七・八